

後のスキャンダルをめぐる日本文学史-古代・中世を中心に-

メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2015-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 牧野, 淳司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/17533

後のスキヤンダルをめぐる日本文学史

―古代・中世を中心に―

牧野淳司

Adultery by Empresses in Classical Japanese Literature

MAKINO Atsushi

A common theme in Japanese literature of the ancient and medieval periods is that of adultery by empresses. Examples include Nijo no Kisaki 二条后 in *Tales of Ise* (*Ise monogatari* 伊勢物語), Fujitsubo no Miya 藤壺宮 in *The Tale of Genji* (*Genji monogatari* 源氏物語), Somedono no Kisaki 染殿后 in the *Collection of Tales of Times Now Past* (*Konjaku monogatarishū* 今昔物語集), and Kenrei Mon'in 建礼門院 in the Engyō-era manuscript 延慶本 of *The Tale of the Heike* (*Heike monogatari* 平家物語). The theme is thus a characteristic feature of ancient and medieval literature in Japan. Why did adultery by Empresses figure prominently in classical Japanese literature? To consider this question, I collected examples of narratives about adultery by empresses. I found that one of the original forms of this narrative is the tale of Jutsubaga 術婆迦說話. Taking the Jutsubaga tale as a prototype, I then investigated the various fictional tales (*monogatari* 物語) and homiletic tales (*setsuwa* 說話) to which this story gave rise and traced their development.

The *locus classicus* of the Jutsubaga narrative is *The Commentary on the Great Wisdom Sutra* (*Ch. Dazhidu lun* 大智度論). Its first citation in Japan is found in Kūkai's *Essentials of the Three Teachings* (*Sangō shiiki* 三教指帰). Kūkai's citation would eventually exert considerable influence on the reception of the Jutsubaga narrative in Japan. The *Annotations on the Essentials of the Three Teachings* (*Sangō shiiki chū* 三教指帰注) preserved in the Nakayama Hokkyōji archive contains a phonetic Japanese version of the Jutsubaga narrative. This version then came to be narrated in the cultural field of waka poetic treatises, from the *Shimeishō* 紫明抄 to commentaries on *The Tale of Genji and the Waka dōmōshō* 和歌童蒙抄. In field of commentaries on the classical poetic anthology, the *Kokin wakashū* 古今和歌集, the narrative underwent a significant transformation. In the *Kokin wakashū kanjō kuden* 古今和歌集灌頂口伝, the Jutsubaga narrative is combined with motifs from the *Momoyogayoi* 百夜通. This combined version can also be found in the *Shintō kanpakuryū zatsubu* 神道関白流雑部 and the *Teikin no shō* 庭訓之抄. The combination of the tale with motifs from the *Momoyogayoi* in these texts suggests that the fields of commentaries on the *Kokinshū* and Yin Yang philosophies overlapped. At the same time, it is a phenomenon that is also related to the secret discourse (*hisetsu* 秘説) that narrates the origins of the seasonal festival called *Tenchūsetsu* 天

中節, which can be found in the *Meibun-shō* 明文抄, *Shūkai-shō* 拾芥抄, and *Segen-Mondo* 世諺問答. The transformed Jutsubaga narrative also eventually gave rise to new Noh plays, such as the *Koi no omoni* 恋重荷.

In the field of homiletic tale collections (*setsuwashū* 說話集), the Jutsubaga narrative can also be found in the *Hōbutsushū* 宝物集, the Engyō-era manuscript of *The Tale of the Heike, the Sangoku-Denki* 三国伝記, and the *Taiheiki* 太平記. In these tales, Jutsubaga is listed as a kind of love that is not in accordance with the Way (*michi* 道). Its inclusion in this list is then later cited in Muromachi-period tales, such as *Jōruri monogatari* 浄瑠璃物語, *Tawara tota monogatari* 俵藤田物語, *Hangan miyako banashi* 判官みやこばなし, and *Koizuka monogatari* 恋塚物語. In addition, in the *Komachi jindai kan* 小町神代巻 and the *Yokozabou monogatari* 横座房物語, I have been able to identify a connection with the fields of waka poetics and Shinto/Yin-Yang philosophy.

In my analysis of the Jutsubaga narrative, I demonstrate that the fields of commentaries on monogatari and waka, homiletic tales, Muromachi-period monogatari, and Shinto/Yin-Yang philosophy mutually influenced each other. I suggest that the links across these fields provided an impetus for the creation of new forms of literature. Furthermore, I also point out that Jutsubaga appears in Chinese and Korean sources, such as *Datang yunfu qunyu* 大唐韻府群玉 in volume twenty, “Xinhuo raota” 心火繞塔 and *Qingshi* 情史, also known as the *Qingshi leilue* 情史類略 in volume eleven, “Huahuo” 化火, compiled by Fengmeng long 馮夢龍. Examples such as these, I suggest, indicate the necessity of investigating the development of the Jutsubaga narrative in the context of East Asia.

後のスキヤンダルをめぐる日本文学史

—古代・中世を中心に—

牧野 淳 司

一、はじめに

日本の古代・中世文学に繰り返し現れるテーマの一つが〈後の密通〉である。『伊勢物語』の二条后、『源氏物語』の藤壺宮、『今昔物語集』の染殿后、延慶本『平家物語』の建礼門院など、後のスキヤンダルが数多く描かれている。これは古代・中世文学の特色の一つと言えよう。本研究は、〈後の密通〉が描かれる作品を見渡しつつ、日本の古典文学が後のスキヤンダルを語り続けたことの意味を考察しようとするものであった。

当初、調査範囲として、平安・鎌倉時代の物語文学および説話文学を想定した。ただし全てを調査するには作品数が多すぎて無理があるので、本研究では、平安の物語文学の伝統を継承しつつ、説話世界とも交渉を持ちながら成立した『平家物語』を手掛かりとすることにした。

具体的には、延慶本『平家物語』第六末（巻十二）の次のような一節に注目した。

天竺ノ術婆迦ハ后ノ宮ニ契ヲナシテ墓ナキ夢地ヲ恨、阿育大王ノ

子俱那羅太子ハ繼母蓮花夫人ニ思ヲ被懸・ウキ名ヲ流シ、震旦ノ則天皇后ハ長文成ニ逢テ遊仙唄ヲ得給ヘリ。我朝ノ奈良帝ノ御娘孝嫌女帝惠美大臣ニ犯サレ、文徳天王ノ染殿ノ后ハ紺青鬼ニヲカサレ、享子ノ院ノ女御京極御息所ハ時平ノ大臣ノ女也、日吉詣給ケルニ志賀寺聖人心ヲ奉テ懸、今生之行業ヲ奉讓シカバ、哀ヲ懸給テ御手ヲタビ、実ノ道ノ指南セヨトスサマセ給キ。在原業平ハ五条亘ノアバラ屋ニ、「月ヤアラヌ」ト打ナガメ、源氏ノ女三宮ハ又柏木ノ右衛門督ニマヨヒテ、香ヲル大将ヲ産給ヘリ。「イカッ岩根ノ松ハ答ム」ト源氏ノ云ケムモハツカシヤ。狭衣之大將ハ、「聞ツ、毛涙ニクモル」ト打ナガメ、天竺震旦我朝、高毛賤モ女ノ有様程心憂事候ワズ（汲古書院の影印版により一部表記を改めた）

治承寿永の内乱後、平家一門のうち唯一生き残った建礼門院は、大原で亡き安徳天皇を偲びつつ一門の菩提を弔う生活を送る。そこに突然現れたのは平家を見捨てた後白河法皇であった。対面した建礼門院は涙ながらに自らの人生を六道になぞらえて語る。天上道・人間道・修羅道・餓鬼道・地獄道を語った後、言い淀んだのが畜生道であった。これは建礼門院にとって語りにくいことであった。なぜならそれは兄

弟である宗盛・知盛との間に「聞ニクキ名」を立てられたことであつたからである。それは高倉天皇中宮としての、また安徳天皇生母としての評判をいちじるしく貶める醜聞であり、それを語ることは自らの名誉を残酷に傷つけることであつた。もちろん実際にそのようなことがあつたかどうかはわからない。だが物語はそのように語らせている。先の引用は建礼門院がまさに畜生道を語り出そうとする場面である¹⁾。

ところが、話はなかなか核心に到達しない。自身の体験を言い出す前に、古今東西の後（もしくは女王・王女）の醜聞が持ち出されているのである。引用文に列举された事例を整理してみると、以下のようになる。

天竺：術婆迦と後の宮・俱那羅太子と蓮花夫人

震旦：則天皇后

我朝：孝謙女帝・染殿后・京極御息所・在原業平・源氏物語女

三宮・狭衣大将

天竺の国王の女である拘牟頭が漁師である術婆迦の思いに応えようとしたことは『大智度論』巻十四に見え、『経律異相』巻三十四や『法苑珠林』巻二十一にも取られている。阿育大王の子である俱那羅太子と蓮花夫人とのことは『大唐西域記』『阿育王伝』などに見える。両者はともに仏典に基づく。則天皇后と張文成のことは『唐物語』などに見え、日本で流布していたとおぼしい。本朝の事例である孝謙天皇の醜聞は『水鏡』や『古事談』に、染殿后が鬼に犯されたという紺青鬼説話は『相応和上伝』『拾遺往生伝』『古事談』などに、京極御息所と志賀寺聖人の説話は『俊頼髓脳』『和歌童蒙抄』などに見える。これらは歴史物語・説話集・歌論書などに採録されて流布した説話と言える。残る三つの事例は作り物語に依拠している。業平以下が『伊勢物語』『源氏物語』『狭衣物語』を踏まえていることは明らかである。

それでは、このような事例列举はどのような意味を持つのであろうか。まずは、先例を挙げる注釈的語りとみななければならない。建礼門院の醜聞を語るに当たって、道ならぬ恋に堕ちた後の先例を想起したのである。語り手は手持ちの知識をこころざしに披露してみせた。先例列举は、饒舌な語り手による注釈行為と見なすことができる。だが、それを逆転させてみることもできる。そもそも、建礼門院の醜聞は事実かどうか不明である。あくまで物語がそのように語っているのである。であるならば、建礼門院の醜聞そのものが語り手によつて創り出されたと考えてみることもできる。もちろん何らかの根拠となる噂はあつたかもしれない。しかし、それをもとに建礼門院の畜生道語りを生み出したのはあくまでも物語である。それでは語り手は建礼門院の醜聞をどのように創り出したのか。その成り立ちの秘密を明かしているのが先例列举の一節であつたと考えてみる事ができるのではないか。つまり、天竺・震旦・我朝の先例になぞらえて建礼門院のスキヤンダルが創られた。先例列举は畜生道語りを生み出す際に参考とされた事例を種明かししていると見なすことができよう。そのように考えると、建礼門院の畜生道物語は、術婆迦から狭衣大将に到る数々の説話・物語を踏まえて誕生したものと見ることができよう。ここに、後のスキヤンダルを描いた文学史が浮かび上がる。それは仏典由来の説話から始まり、虚構の物語に至るものであり、天竺・震旦・本朝を含むものであつた。延慶本は、建礼門院の畜生道語りをそのような文学史上に位置づけて示しているのである²⁾。

延慶本の先例集はそのまま、後のスキヤンダルをめぐる文学史となつていく。これをいかに読み解くかが、本研究の目標として設定された。そこで、個々の事例の調査を進めたのであるが、その過程で、事例の筆頭に挙げられた術婆迦説話の重要性に気付いた。術婆迦の説話そのものが、新たな物語を生み出す原動力となつていくことが明らか

かになってきたのである。術婆迦は、単に後の密通の最初の事例であるだけではない。術婆迦説話こそが多様な密通の物語を作りだす力を秘めていることが判明した。後のスキャンダルをめぐる文学史を記述するためには、術婆迦説話の果たした役割を見極めることから始めなければならぬ。本稿では、術婆迦から派生した説話・物語を探索した結果を示しつつ、術婆迦が各種説話・物語を増殖させていった様相を記述してみることとする。これは後のスキャンダルをめぐる文学史を構想するための第一歩となるものである。

二、術婆迦説話の源流

延慶本の「天竺ノ術婆迦ハ后ノ宮ニ契ヲナシテ慕ナキ夢地ヲ恨」の典拠は『大智度論』巻十四である。

如説國王有女名曰拘牟頭。有捕魚師名述婆伽。隨道而行。遙見王女在高樓上窓中見面。想像染著心不暫捨。彌歷日月不能飲食。母問其故以情答母。我見王女心不能忘。母諭兒言。汝是小人。王女尊貴不可得也。兒言。我心願樂不能暫忘。若不如意不能活也。母爲子故入王宮中。常送肥魚美肉以遺王女而不取價。王女怪而問之欲求何願。母曰王女。願却左右當以情告。我唯有一子敬慕王女情結成病。命不云遠。願垂愍念賜其生命。王女言。汝去月十五日於某甲天祠中住天像後。母還語子。汝願已得告之如上。沐浴新衣在天像後住。王女至時白其父王。我有不吉須至天祠以求吉福。王言大善。即嚴車五百乘出至天祠。既到勅諸從者。齊門而止獨入天祠。天神思惟。此不應爾。王爲世主不可令此小人毀辱王女。即厭此人令睡不覺。王女既入見其睡。重推之不悟。即以瓔珞直千萬兩金遺之而去。去後此人得覺見有瓔珞。又問衆人知王女來。情願不遂憂恨懊惱。姪火內發自燒而死。以是證故知。女人之心不擇貴賤

唯欲是從（大正新修大藏經二五冊一六六頁）。

以下のように要約できよう。国王の娘で拘牟頭という女性がいた。一方、捕魚師で述婆伽という男がいた。王女の姿を見てそれが心に焼き付き、飲食もままならない状態になった。母が理由を問うと男は事情を話す。母は宮中に入り、王女に魚を献上するようになった。王女が怪しんで問うと、母は息子のことを話す。王女は来る十五日に天祠中の天像の後ろで待つように言う。男は沐浴し新衣を着て待った。ところが天神は小人に王女を毀辱させるわけにはいかないと考え、男を眠らせてしまった。王女が訪れても男は目覚めない。そこで瓔珞をのこして去った。目覚めた男は王女が来たことを知り、憂恨懊惱し、淫火が内から発り自ら焼け死んでしまった（『経律異相』巻三十四、『法苑珠林』巻二十一もほぼ同内容）。

延慶本との違いは、術婆迦の恋の相手が国王の娘である点である。延慶本では「后の宮」であった。卑賤な男と王女との関係が、后との内通へと変化している。術婆迦説話の源流は『大智度論』であるが、延慶本は直接それに拠っているわけではない。以下、日本における術婆迦説話の受容について調査した結果を述べていきたい。

三、先行研究

本研究の過程で、術婆迦について論じた重要な先行研究・関連論考があることが分かった。そのうち島内景二氏の論（注4論文）は術婆迦説話を正面から取り上げたものである。術婆迦を引用する主要な作品を網羅しつつ、日本における術婆迦説話の存在の大きさを指摘しており、本研究を推進する過程で、多大な恩恵を受けた。一方、このほかに鈴木元氏と大谷節子氏の論に出会うことができた。これらは術婆迦説話を直接の論究対象としたものではないが、島内氏の論と合わせ

見ること日本における術婆迦説話の重要性がよりはつきりするよう
に思われた。以上の論文で指摘された資料をあらためて一望してみる
ことで、術婆迦説話の存在感の大きさがより鮮明になると思われるの
である。

(1) 島内景二「術婆迦説話にみる受容と創造」(注4論文)

島内氏は、最初に『源氏物語』の注釈書を指摘している。『源氏物
語』帚木巻に、

今、やうやう忘れゆく際に、かれ、はた、えしも思ひ離れず、を
りをり人やりならぬ胸こがるる夕もあらむとおほえはべり。これ
なむ、えたもつまじく頼もしげなき方なりける。(新編日本古典
文学全集)

とある。雨夜の品定め、頭中将が常夏の女(夕顔)との別離を
語った場面であるが、傍線部について『紫明抄』が以下のように付注
している。

むねこかる、ゆへもあらむとおほえ侍る
三教指帰云、寧莫術婆迦之焼胸

術婆迦は魚をうる人也、帝王のひめ宮を見たまつりて、いかに
してえてしかなと思へり、もつところの魚をたてまつりてあたひ
をとらずしてかへらんとするに、皇女あたひをすつる心をたつね
給に、身をなけ命をすて、あふにかへんと思ゆへに、あたひをと
らず、といふ、皇女こころさしの切なる事をあはれみて、この月
の十五日に社にまうつへき事あり、その時かならずあひまつへ
し、との給に、術婆迦まうて、皇女をまちたてまつるに、当社の
明神この事をかみて、方便をなさく、わかたんなの君をしてい
やしきしつかやつこにとつかしめん事心のま、ならば、あに神非

例をうくるにあらずや、た、婆伽をしてねふらしめんとおほす、
皇女すてにまうて給に、婆伽社頭にいねたり、おこさしむるにあ
へておとろかす、皇女御衣の瓔珞をときて婆伽伽衣にかけてかへ
り給ぬ、術婆迦ねふりさめてこのやうらくを見るに、心のをくと
ころをしらす、則むねのうちに姪慾のほのほあらはれて、みつか
らこかれていのちをうしなへり、世中に不相応のふるまひある物
を、はか、などいふはこの例ならんかし(玉上琢彌編 山本利
達・石田穰二校訂『紫明抄 河海抄』角川書店)

最初に『三教指帰』を引き、続けて術婆迦説話を語っている。「胸こ
がるる夕」に術婆迦を持ち出すのは唐突であるが、『三教指帰』が両
者を結び付けている。『大智度論』には「姪火内發自燒而死」とあつ
たが、「胸」を焼いたとはしていない。『三教指帰』で「胸を焼く」と
の表現が加わったことにより、「胸こがるる」と術婆迦とが繋がった。
『紫明抄』が語る術婆迦の物語は仮名文へと和らげられているが、姪
慾の炎が「むねのうち」に現れたとしており、「胸こがるる」と対応
している。なお、術婆迦が恋した相手は「ひめ宮」となっている。島
内氏は、中世初期には術婆迦の話が流布していて、その影響下に『紫
明抄』などが『源氏物語』の注釈作業に術婆迦を導入、これにより術
婆迦の話が一層知名度を増し、それがやがて中世物語を創造する力を
持っていたのだと述べている¹⁵⁾。

『紫明抄』で引かれる『三教指帰』上の文は、

恆見蓬頭婢妾、已過登徒子之好色、況於治容好婦、寧莫術婆迦之
焼胸(恆に蓬頭の婢妾を見ては已に登徒子が好色に過ぎたり、
況や治容の好婦に於てをや、寧ろ術婆迦が胸を焼くこと莫からむ
や)(岩波古典文学大系)

というもので、島内氏が術婆迦を我国古典文学に導入した大きな源泉
の一つと指摘する通りであろう。『三教指帰』については、中山法華

經寺藏本『三教指帰注』も島内氏により指摘されている。

術婆伽焼胸云、大唐ニ有シ下良女ノ子也、江河ニ魚ヲソント食トセシ者也、ツリシテ返シ時二道ニ長者門ヲスキルニ高樓帳ヲ風吹上ケタルヨリ此ヲ見ミテ恋ヒノ病ニ成テ物不食、母アヤシンテ此事ヲ問ニ不答、再三問レテ答テ云ク「美君ヲ見ヨリ恋病ヲ付タル也」、母ノ云ク、「安スキホトノ事也」トテ術婆伽ニ魚ヲツラセテヒメ君ノモトへ数十度以參ル、ヒメ君奇シンテ問テ云ク「何事所望ノ有ルソ」ト問フ、母事由来ヲ答テ申ス、ヒメ君答テ云「ヤスキホトノ事也、アスヘシ」トテ「但是ニ天神マシマシス、ソレニテアフヘシ」トテ日定メテ約束シテヒメ君父長者ニ「モノマウテシ候ム」トテ出立テ通夜ニ參ル、時ニ術婆伽之參相テヤシロノカタハラニネイリタリ、ヒメ君ミ行イテヲトロカセトヲトロカス、依テヒメ君玉カツラヲヌキテ重ニ打懸テ返了ヌ、時ニ童ヲトロキテ姪欲炎胸ヨリ出テ焼死了、故焼胸云也（築島裕・小林芳規編『中山法華經寺藏本 三教指帰注』武蔵野書院）

島内氏も言うとおり『紫明抄』とは若干の違いがある。例えば傍線箇所であるが、風が帳を吹き上げた瞬間に女を見ることは物語や説話における恋の発端の語り方の一類型である。恋を打ち明ける術婆伽に対し「安きほどの事也」と答える母親像は悩む男と対照的であるが、姫君の答えに「やすきほどの事也」との台詞が繰り返されているのも注目される。このような繰り返しの表現は口語り（を装った語り）の痕跡を感じさせる。『三教指帰』を講釈する場と関係する可能性もあろう。注釈の場に術婆伽の説話が流入し、和文化して語られている状況を認めることができる。

島内氏が次に目を向けているのが説話集である。『宝物集』巻五に以下のようにある。

いふ。魚をもて王宮にいたるに、おもはざるに后をみたてまつる。術婆伽、后を見たてまつりて後、煩惱のおもひさむる時なく、なげきかなしみて、病の床をおきす。術婆伽が母、この事をあやしみて、ゆへをとふに、術婆伽かくすとすれども、つゝに母にかたる。子の病をなげきて、王宮にまうでて、后のかたにたずむ。后あやしみて、ゆへをとひ給ふ。網人が母、ことのありさまを申。后、あはれとおほして、五百両の車をかざりて、社殿にまいりて、網人にははんとちぎり給ふ事なり。大論に、「女は貴賤をきはらず、但欲是にしたがふ」と申たるもことほりにこそ侍るめれ。（岩波新日本古典文学大系）

「女人は、心うくうたてきもの」であることを言うための説話になつていて、『大智度論』が「女人之心不擇貴賤唯欲是從」の例証として術婆伽を挙げた態度を継承している。

ここでは、術婆伽の相手が「后」になつていことが確認できる。ところで、『宝物集』は女人のあさましさを言うために他にも多くの事例を列挙しているが、このような形式は説話集や軍記物語にしばしば見えるようである。島内氏は『三國伝記』巻六第二十七「志賀寺聖人恋路事」と『太平記』巻十一「越中守護自害事付怨霊事」を指摘している。本文引用は省略するが、『三國伝記』は志賀寺聖人の恋に付随して術婆伽と則天皇后を挙げている。『太平記』でも同様に、恋ゆえあさましき姿になつた例として術婆伽を想起している。『宝物集』『三國伝記』『太平記』からは、あさましき恋の先例（恋のためし）を列挙する営みが行われていたこと、その中で天竺の事例として術婆伽が挙げられることが多かったことがわかる。

『源氏物語』の注釈世界や説話集を踏まえた上で島内氏がもつとも豊富な事例を指摘しているのは室町時代物語である。赤木文庫蔵『浄瑠璃物語』や北大図書館蔵『浄瑠璃十二段草子』に、術婆伽の名が登

場する。島内氏が指摘するように「じゆつま」など本来の名前からの乖離や、志賀寺上人の話などとの混乱が見えるが、説話世界におけるのと同様、恋の先例として引かれた事例と言えよう。

だが、このような事例ばかりでないことも島内氏が述べるところである。『俵藤太物語』は恋の先例を列挙した部分に術婆迦を挙げるが、実は『俵藤太物語』の物語自体が術婆迦の話によく似ている。すなわち、藤太はある時簾中の美女を見初め、恋に陥る。恋の病の床に臥す藤太を「しぐれ」という女房が訪れ、恋の仲介することを約束するが、この話自体が術婆迦説話の本来の形態の換骨奪胎（しぐれが術婆迦の母の役割）であった。島内氏は、この物語の中に術婆迦の故事が引用されるのは必然で、俵藤太をめぐる物語が術婆迦説話を基にして創作されたことを示す痕跡だとみなしている³⁰。

また別の興味深い事例として、『神代小町巻』も挙げられている。夢にあふべきたよりもなく、おもひのけぶりとくぶるほどに、むねくるしやとかなしみけるが、恋には人のしなぬかは、百夜をまたでしに、けり。天竺のじゆつばか、おもひのほのほに身をこがしけんためしも、かくやと覚えてあはれなり。（未刊御伽草子集と研究（四））

この物語には小野小町を恋した深草の少将の故事が含まれる。それは、「思ひきやしちのはしがきかきつめて百夜もおなじまるねせんとは」という和歌をめぐる百夜通いの話であった。その話に関連して術婆迦が想起されている。「けぶり」と「ほのほ」が連想関係で繋がっている。島内氏は、ここに歌学書系統の注釈書の影響を見た。指摘されたのは『和歌童蒙抄』第四、恋である。

恋々て人にことごと恋しなばもえんけぶりは恋のかやせん
六帖に有。恋にもえん煙とは百毫式に、むかし天竺に術婆迦といふ童子あり。其母とし比に后につかへまつりにけり。此わらは

おもはずに后を見奉りけるより、いかでかとおもふ心つきて、人しれずいもねずやせゆきけり。母あやしみてとへど、いはずして物思へるけしきあらは也。母の云、何によりてか我にかくすべきとせめければ、有のまゝに答へけり。母思ひくらしていはいく、江のほとりに行ていを、釣て毎日にきたれ。我取次て后にたてまつらんとをしふ。是によりて日ごとに鯉を釣て来たれば、したがひて母是を后に奉る事三年になりぬ。后心ざしの深き事をあはれびて、能隙にとひたまふ。いかなる事を思ひてするわざぞと。母恐れながら、此わらはの思へる事をもらし申。天竺のならひ、心に思ひ詞にいひつる事をたがへざりければ、逢べきよしを契り給ひつ。后便をえんことかたければ、はかりことをなしてのたまはく、術婆迦先自在天神にまゐり宝殿の内にかくれをれ。参りて逢んと契りて御幸して自在天神の宝殿に御こしをよせて、一夜すごさしめ給ふ。人静まり夜ふけて后術婆迦をる処に行給へるにねいりてしらず。其しるしに玉のかんざし一すぢを置て、こしのもとへ帰り給ひぬ。また行給へるに驚かず。其しるしに又かんざし一筋を置て帰り給ひぬ。爰に母術婆迦に問に、ねいりて覚えず。唯此玉のかんざしばかり有とこたふ。母今はちから及べからずといふを聞て、術婆迦が胸より火出来て、もえて煙に成て失ぬと云々。彼鯉をつりて事を通せしよりこひとは云也。もろもろの恋のおこり、この術婆迦よりはじまれり。（日本歌学大系 別巻一）

『古今和歌六帖』の「恋々て」の和歌に関する注釈の中に術婆迦の話が引かれる。その出典とされる「百毫式」については未詳であるが、ここではすでに術婆迦の恋の相手が「后」へと変化していることが確認できる。また「恋」と「鯉」とが結びつけられていることは後述する神道・陰陽道世界との繋がりを示している。さらに島内氏は『古今和歌集灌頂口伝』を指摘している。「一、あかつきのしぢのはし

がきも、夜がきの哥事、伝云、兆段といふ文に」として、術婆迦の物語が語られている。「天竺戒日大王の后」を術婆迦が一目見て「恋の病」となる。それを聞いた大王は「情は人のためならず。なにかくるしき。一夜あひ給へ」と后に逢瀬を勧める。后は「春喜楼殿」に出向いて大象の車の榻をおき、術婆迦に百夜の殿居を命じる。術婆迦は百夜通うが百日目にはに疲れて眠り込んでしまう。行啓した后は術婆迦を起すが目を覚まさないで書き付けを残して還る。なげき悲しんだ術婆迦は、「むねよりおもひの火の出で其身をやくのみならず、春喜殿よりはじめて、宣喜殿・陽明殿・小陽殿・後園殿等の一百三十六の台々をみなみな焼けり」というのである（片桐洋一編『中世古今集注釈書解題 五』）。

術婆迦の炎が宮殿を焼いたという記述も後述する神道・陰陽道世界と交渉を持つと思われる。島内氏は『古今和歌集灌頂口伝』について、注釈（実事の詮索）が創作（虚構の生産）と結びついた好例だとした。術婆迦の故事を骨格にして細部を和歌説話で装飾したもので、仏典の説話が和歌文学と融合する場として中世歌学書世界があったとした。それは学問であると同時に文学創作の場であり、『古今和歌集灌頂口伝』があつてこそ『神代小町巻』が出現したと言うのである。術婆迦説話が歌学世界で独自の展開を遂げ、新たな物語を生み出す原動力になっているとの指摘は重視されなければならない¹⁰⁾。

島内氏の論では、術婆迦説話が注釈世界（源氏・三教指帰・歌学）に受容され変容を遂げつつ、新たな室町物語を生み出していく役割を果たしたことが指摘されている。術婆迦説話の影響力は予想以上に大きいと言わなければならない¹¹⁾。

(2) 鈴木元「和歌と連歌―火伏の口伝をめぐって」『国文学 解釈と教材の研究』二〇〇〇・四。

鈴木氏の論により、術婆迦譚（に近似する話）が神道、陰陽道（歳時記）、和歌、庭訓往来注など、多様な学問の場（知を形成する場）で伝えられていたことが判明する。以下、氏によって指摘された資料を列挙する。最初は東洋文庫蔵『庭訓之抄』である。

隠岐鮑周防鯖近江鮒淀鯉

昔中天竺有賤、云述馬迦即魚壳也、彼其時行王宮、内裏參魚壳、此時商人奉見后、沈恋命絶、時彼母參内裏、魚奉后及度々、彼国法欲契人、先見德后契也、此故后怪給、彼母問子細給、母在俣奉語、后仰糸安事也、車百夜可通宣、述馬迦聞此由、喜无限、然間、夜通志深、百夜満時、后内出給、雖然商人深沈眠、不知出御、后御怒目覚給不覚、然彼験、翠十二彼胸置給、其後驚此験奉見、余沈恋成燃焼時、彼側修護摩有貴僧、以酒水消之、此恋煙焼上、焼内裏、然処述馬迦誓曰、我必成火、燃苦患悲事无喻方、然間、止燃火、誓成火守護神、故契事七月晦日夜也、次日聽成火畢、雖然調伏一切惡事火誓願給、**㊦**字水種也、水云者鯉鱗也、此字鱗能持水鱗也、去鯉上竜門時、百日干之不干鱗也、後准鯉申也、

㊦字水則鯉鱗習也、始但魚云也（東洋文庫蔵一—C—62）

これは本来「淀鯉」についての解説であるが、突然「述馬迦」の百夜通い説話になる。述馬迦の恋の想いが炎となって燃え上がり、その炎を貴僧によつて鎮められたことを契機として、述馬迦は「一切惡事火」を調伏する「守護神」となり、その際、水のシンボルとなったのが「パン」字であり「鯉鱗」であったとする。但し、後半部分「故契事七月晦日夜也」という記述はいかにも唐突であり、ある特殊な文脈から抜き出した故の不整合ではないかと鈴木氏は考えた。そして、述馬迦が「鯉鱗」へと繋がるめづらしい例として神宮文庫蔵『神道関白流雜部』

を指摘したのである。

日本記火伏大事／伊勢太神宮之重宝之／八月火伏縁起相伝事

昔中天竺有賤者、名曰述馬加、則魚壳也、彼魚壳其時王宮行參内裏魚壳、此時彼商人奉見后、沈恋命終時、彼者母參内裏、魚奉治及度々、彼国法欲契人時、先見德後成契也、此時治怪彼商人母事子細問玉へり、母任有奉語此由、后言糸安事也、車榻百夜可通言へり、述馬加聞此由悦無限、然程夜通志深、百夜滿時后行合給へり、雖然彼壳人深沈眠不知御行、后慙覺給共終不知、然後驗翠二分一胸置帰給、其後驚此驗奉見、余沈恋成焦然時、側修護摩僧一人有之、以灑水消之、此恋煙燃登為焼内裏、然述馬加誓願曰、我心成火燃時苦患悲無喻方、然間留燃心火誓成火守護神、故契欲夜七月晦日夜也、次日廳成火、雖然心翻調伏一切惡事火誓願、**㊦**字書事、此字水種子也、水者鯉ヒレニ尊者ヒレ、或杉指ヒレト云ヒレ有、此ヒレ能持水ヒレナリ、サレハ鯉登滝門滝時、百日干之、更不干ヒレ也、故 水則其時鯉ヒレト習也、鯉本以人魚名之、然トモ彼時ヨリ恋ニナソラヘテ鯉ト申也（神宮文庫蔵一—10680）

「火伏」についての口伝の中にある記述で、「**㊦**八月一日天中節赤口白舌隨節滅」の文句と結びついて語られている。「庭訓之抄」で「故契事七月晦日夜也」とあった唐突さはこの術婆迦譚が八月一日の天中節にまつわる秘伝として語られていたことで理解できるとした。鈴木氏は続けて、天中節に関する説を記載するとして『世諺問答』および、そのもととなったと思われる『拾芥抄』巻上歳時部を挙げている。『拾芥抄』を示すと、以下のような記述になっている。

消除失火盜賊疾病口舌災難方七月晦日取生氣方木燒壘

八月一日日出以前書八月一日天中節赤口白舌隨節滅押門陰陽秘方

昔大國后於天中樓有契事、其人依不遂素懷、忽成火神、焼天中樓

之時、后呪云、八月一日天中節赤口白舌隨節滅云々。或書節言契云々（大東急記念文庫善本叢刊中古中世篇『類書Ⅱ』）

鈴木氏は「陰陽秘方」という記載からして、陰陽道書の背景がある可能性を考えた。『神道関白流雜部』などは、陰陽道と密教、修験道、神道が相互に融合しあう複雑な状況の中、「車榻百夜可通」とある通り、和歌世界からの影響も受けつつ成り立っているのである。鈴木氏により、神道・陰陽道と和歌（歌学）、庭訓往来を巡る注釈、講釈の場が重なり合うことが示された。

（3）大谷節子「恋の奴の系譜―説話と能1」『世阿弥の中世』岩波書店、二〇〇七（初出は二〇〇〇）

鈴木氏の論も参照しつつ、謡曲「恋重荷」について論じている。「恋重荷」は原曲「綾の太鼓」以来、〈賤者の身分違いの恋〉を曲の骨格とするが、その構想の原拠、主題を提供する説話群の一つが『古今和歌集灌頂口伝』などに語られる術婆迦の恋の物語であることが鮮やかに示された。「恋重荷」の後シテが葉守の神になって後の守護神となる結末と、術婆迦が火の守護神となったことが符号することも示されている。「葉守の神」へと転生した賤者、山科の承仕の物語は、術婆迦譚に重ねて柏木の物語を下敷きに読むことによって、「恋の奴」の物語としての全貌を、重く、悲しく現してくる」のである。大谷氏によつて、術婆迦説話に重ねられた柏木物語を踏まえて、新たな能が作られていることが示された。術婆迦説話は、能をも生み出す力を持つていた。

四、新たに見出したもの

このほか、これまでに見出した資料を三点挙げる。一点目は『恋塚

物語』で、物語の序文で、術婆迦を含む恋の事例を列挙している。

すへて女人はとんあひのまうねんたり。このゆへに、一ねん五百しやうけんねんむりやうこうととく。なんしは女人のためにして、とくたうをさまだけ、よにんはなんしのゑんにして、しやうしをと、こふるとかや。しかれば、てんちくのしゆつはかは、きさきをこひてほむらとなり、わかつてうのきそうしやう、恋ゆゑあをきおにとなる。たいとうの一きやうあしやりは、やうきひになをたつて、くわうこくへなかされけり。ほんてうのしかてらの上人は、京こくのみやすところをわりなく恋たてまつりてこそ、御てはかりをたまはり……恋田知子「陽明文庫蔵『道書類』の紹介(二)」「恋塚物語」翻刻・略解題」「三田国文」四六、二〇七)

術婆迦以外では、紺青鬼・一行阿闍梨・志賀寺上人の例が挙がっている。『恋塚物語』は遠藤盛遠の恋を描いた物語で、延慶本など『平家物語』の読み本系諸本に収録される文覚(遠藤盛遠)の発心譚としても知られている。『平家物語』諸本、『恋塚物語』諸本によつて物語の展開や細部に異同があるが、盛遠の恋の物語が生成、展開していくある段階で、術婆迦の物語と接触していることを陽明文庫蔵『恋塚物語』は示していると考えたい。盛遠の恋の物語は、術婆迦と出会うことで誕生(もしくは成長)した一面を持つと考える¹²⁾。

二点目は『和漢朗詠集和談抄』(恋の部)で、術婆迦説話が、かぐや姫伝承・生田川伝承に続ける形で簡略に付されている。

我恋はゆくゑもしらすはてもなしあふをかきりとおもふはかりそ

此、躬恒作、古今哥也。向後モ不知ハテモナシトハ、ウハノ空ニアクカレタル心也。恋路ノ行末モ知ヌタメシニハ……(以下、竹取翁の異聞)高山ヲ尋ルニ、富士山也ト思ヒ、像見ノ鏡ヲ胸ニ

当テ、彼峰ニ上リ給タレトモ、恋シキ人モ中空ノ、尽ヌ歎キノイヤマシテ、恨千種ノ思草、葉末ノ露ノ御命モ、既ニ消ントシ玉ケルニ、御胸ノ炎、形見ノ鏡ニ燼付テ、俄ニ天ニ沸キ上ル。……(統いて生田川(求塚)伝承)……彼ノ天竺ノ述婆伽ハ、后ヲ恋テ、ホムラトナリ、我朝ノ上人モ、其下モエヲ志賀寺ヤ、ヲモキカ衣ノサヨ衣、アヲキ鬼トソ成ニケル。合ヲ限ノ恨ハ、皆哀ナル理リ也。(和漢朗詠集古注釈集成 第二卷)

島内氏は東北大学図書館蔵『古今秘決』にある『竹取物語』の異伝に術婆迦説話が関与した可能性を指摘していたが、かぐや姫伝承と術婆迦説話とは和漢朗詠集の注釈世界でたしかに結びついていた。術婆迦物語とそこから連想される恋の物語・説話とは、相互に影響、作用し合いながらそれぞれ新たな物語へと変容していく動きの中に位置づけて見なければならぬ。

三点目は藤原孝範(一一五八―一二三三)撰の『明文抄』で、『拾芥抄』の依拠資料の一つとなつたと考えられる¹³⁾。鈴木氏が指摘した『拾芥抄』の天中節の由来を示す伝承は歳時部に含まれる。ここでは「後漢書」「初学記」「十節記」「荆楚歳時記」など多数の文献を引いて、年間を通して現れる節日などを解説しているが、それらは全て『明文抄』天象部に挙げられた解説と重なり、引用文献も『明文抄』が引く文献のうちいくつかを使用したものと見なせる。八月一日の天中節に関する伝承(陰陽秘方)もすでに『明文抄』に同文が見えているわけで、十三世紀初頭にはすでに歳時記の中で伝えられていたことが確認できたことになる。

五、整理

以下、術婆迦説話とそれに関連する作品・資料について、整理を試みる。

日本で術婆迦について言及した最初の資料として、『三教指帰』を挙げるができる。ここでは術婆迦が「胸を焼いた」とされ、これが日本における術婆迦享受に大きな影響を与えることになった。術婆迦は「胸より火」を出したのであり（和歌童蒙抄・古今和歌集灌頂口伝）、『源氏物語』の「胸こがるる」と結びついた。「胸の炎」は「恋」の思いを表現するのに相応しいものであった（和漢朗詠集和談抄）。『三教指帰』の注釈世界では、和文化した術婆迦の物語が語られるようになっていた（中山法華経寺藏本三教指帰注）。風が「帳」を吹き上げた際に垣間見するという設定や、会話文における繰り返し表現など、『大智度論』の本文からは離れた語りが展開していたことが知られる。

和文化した術婆迦物語は歌学世界や『源氏物語』の注釈世界でも語られていた（和歌童蒙抄・紫明抄など）。これらは『大智度論』を源流とする点が変わらないが、さまざまに異なりが生じている。もともと国王の姫宮であったのが「后」へと変化している事例も確認できる（和歌童蒙抄）。『三教指帰』と『源氏物語』の注釈世界（光源氏物語抄・紫明抄・河海抄）と歌学世界は、それぞれ相互に影響しあいつつ、和文化した術婆迦物語を共有していたとみておきたい。細部に異なりがあるのは、それぞれが講釈の場（口語りの場）を経由するためだと考えることもできよう。術婆迦説話の展開には、このような注釈の場が果たした役割が大きかった。

和文化的した術婆迦説話は、中世における注釈世界に影響を及ぼして

いく。『和歌童蒙抄』にあった「恋」と「鯉」の結びつきは、『神道関白流雑部』『庭訓往来抄』にも見えた。『庭訓往来』の注釈世界や神道・陰陽道の秘説は歌学世界と交渉しながら独自の発展を遂げていったのである。「鯉」と「恋」とを結び付ける『横座房物語』のような表現はこのような世界を踏まえて出現した。和漢朗詠集注釈の世界ではかぐや姫伝承との交渉も見られた（和漢朗詠集和談抄）。

歌学世界における術婆迦説話は『古今和歌集』の注釈世界で大きな変貌を遂げる。『古今和歌集灌頂口伝』では「あかつきの」の和歌注で術婆迦の物語が、「百夜通」のモチーフと融合した形で語られている。これは『神道関白流雑部』や『庭訓之抄』にも見えることで、古今注と神道・陰陽道世界とが重なり合っていることが確認される。『古今和歌集灌頂口伝』の、術婆迦の炎が多くの宮殿を焼いたという記述が、『神道関白流雑部』などで術婆迦の恋の煙が「内裏」を焼いたとする記述と対応していることもその証左となる。古今注や神道・陰陽道世界で展開した術婆迦説話は新たな能を生み出すことにもなった。術婆迦の恋の物語は能「恋重荷」の主題の原梗の一つとなった。また、「恋重荷」では、賤者が「葉守神」へと転生するが、これは『神道関白流雑部』などで術婆迦が火の守護神となることと対応していることも指摘されている。

以上は、歌学・古今注および神道・陰陽道世界であったが、これとは別に説話集の世界で術婆迦は頻繁に引用された。『宝物集』『三國伝記』『太平記』などで、道ならぬ恋、あさましき恋を列挙するなかに、その一例として術婆迦が挙げられるのである。延慶本『平家物語』の建礼門院畜生道もこのような列挙形式をとるものの一つである。このような恋のためしを列挙する方法は室町時代物語に継承されていて、『淨瑠璃物語』『俵藤太物語』『判官みやこばなし』『恋塚物語』などに術婆迦への言及が見える。また『小町神代巻』や『横座房物語』には

歌学世界や神道・陰陽道世界との交渉が見られた。室町時代物語の中には術婆迦説話をもとに新たに創造されたと思われる物語が見られる(浄瑠璃十二段草子・うそひめ・猿源氏草紙)。これらは能「恋重荷」とともに、術婆迦説話が新しい物語を生み出す力を供給し続けたことを示す。

一方、術婆迦の名は出ないが、よく似た説話が節日、天中節の由来を語る秘説の中で伝えられていた(明文抄・拾芥抄・世語問答)。これらは神道・陰陽道世界に入り込み、『神道関白流雑部』や『庭訓往来抄』で術婆迦と融合して現れることになった。

以上、便宜上、『三教指帰』や『源氏物語』の注釈世界、歌学・古今注の世界、説話集、室町時代物語、神道・陰陽道世界などと、それぞれの領域を区別して記述してきたが、これらの領域はそれぞれが複雑に重なり合っていた。お互いに交渉、影響し合いながら、それぞれが形を変えていったのである。術婆迦を通して、諸領域が交錯し合いながら変貌していく様相―学問・文学を生み出す一種の運動体―を見渡すことができるのである。それは我々の文学観や想像を超えて雑多な要素が入り交じる混沌とした海のような世界である。そして、そこから新たな恋の物語の生命が生まれてくるのである。複合的世界から誕生した物語や説話は、単線的な系譜関係のもとに位置づけられるものではない。また一つの領域、ジャンル内での展開の中で捉えられるようなものではないのである。作品の系譜やジャンルの発展で描くのと異なる、運動体としての文学史が構想されなければならない。周辺領域を融合させつつ展開した文学史の中で、確かな存在感を持つのが術婆迦であった。

六、東アジア世界での広がり

術婆迦は韓国でも独自の説話を生み出していた。『大唐韻府群玉』巻二十「心火繞塔」に引かれる「殊異伝」である。

志鬼新羅活里馱人、慕善徳王之美麗、憂愁涕泣、形容憔悴、王幸寺行香、聞而召之、志鬼婦寺塔下、待駕幸、忽然睡酣、王說臂環、置胸還宮、後乃睡覺、志鬼悶絶良久、心火出繞其塔、即變為火鬼、王命術士、作咒詞曰、志鬼心中火、燒身變火神、流移滄海外、不見不相親、時俗、帖此詞於門壁、以鎮火災(小峯和明・増尾伸一郎編訳『新羅殊異伝』平凡社東洋文庫、二〇一一)

この説話の源流が『大智度論』であることを印権煥氏が指摘している¹⁴⁾。この中で注目されるのは、志鬼が「火鬼」と変じ、それに対し王が術士に命じて「咒詞」を作らせたということ、これが火災を鎮める呪符となったという。印権煥氏はこの部分は韓国の民間信仰と習合して変容した箇所だと考えたが、日本の『庭訓之抄』や『神道関白流雑部』で術婆迦が火の守護神と変じたことや、『明文抄』で后が呪言を唱えたことと近似する内容となっている。新羅時代の説話集である「殊異伝」と、『明文抄』に見られるような天中節の秘伝や日本の神道・陰陽道世界で伝えられた術婆迦説話との間に直接的な影響関係を見いだすことは難しいかもしれない。しかし、何らかの交渉を想定したくなるのである。

印権煥氏以降、「志鬼」説話研究が韓国でどのように展開したかについては朴知恵氏が研究史をまとめているが¹⁵⁾、趙鏞豪氏によって、明時代に編纂された馮夢龍編「化火」『情史』(または、『情史類略』)巻之十一が指摘されているという¹⁶⁾。

蜀帝生公主 詔乳母陣氏乳養 陣氏携幼子 與公主居禁中 各

年長 陣氏出宮 其後 此子以思公主 故疾亟 一日陣氏入宮 有憂色 公主詢其故 陣氏陰以實對 公主許允 遂托幸祇廟 其與子會 及期 子先在廟候之 忽睡去 既公主入廟 子沈睡不醒 公主待久 將歸 乃解幼時所弄玉環 附於子之懷中而去 及子醒寤見之 怨氣成火 廟宇亦焚 祇廟胡神也

基本的に術婆迦説話の展開と一致するものと見てよいであろう。詳細な検討は今後の課題とせざるを得ないが、このような事例は、術婆迦説話の展開を東アジア全体の中で理解する必要性を示している。術婆迦は、日本の文学史をアジアの中で見つけていくための具体的な材料の一つでもあった。

〔注〕

- 1 建礼門院の畜生道語りについて、佐伯真一「建礼門院という悲劇」角川選書、二〇〇九を参照。
- 2 先例集が建礼門院の畜生道語りを生み出した可能性について、拙稿「安居院流唱導書の形成とその意義」『中世文学と寺院資料・聖教』竹林舎、二〇一〇で考えてみた。本稿では建礼門院の醜聞が語られた意味について論じる余裕がないが、試験的な考察はこの拙稿で試みている。
- 3 延慶本に列挙された事例に基づく文学史について、拙稿「唱導資料が開く世界」『仏教文学』三六・三七合併号、二〇二二で見直しを述べた。
- 4 術婆迦説話の典拠が「大智度論」であることは島内景二「術婆迦」説話にみる受容と創造「源氏物語の影響史」笠間書院、二〇〇〇（初出は一九八七）で指摘されている。
- 5 島内氏は「紫明抄」を継承した「河海抄」「仙源抄」も指摘している。また、単行本収録時には新たに「異本紫明抄（光源氏物語抄）」も指摘された。「異本紫明抄」は「紫明抄」と細部で異なりを見せている。「河海抄」は「人やりならぬむねこかる、夕もあらむと 三教指冊云、寧莫術婆伽之焼胸」と簡略に記すのみで和文化した物語を記さない。「異本紫明抄」から「紫明抄」「河

海抄」へ到る流れの中で、術婆迦説話を扱う態度に変化が見られる。注釈史の問題として検討すると興味深いのではないか。

- 6 例えば延慶本「平家物語」第二末（巻五）にある文覚発心譚に見える。延慶本「平家物語」文覚発心譚でも、恋に悩む遠藤盛遠と、恋の手引きをあっさりと言った尼公とが対照的に描かれる。
- 7 そのほか、「浄瑠璃十二段草子」の西行（佐藤憲清）説話は、術婆迦を意識したフィクション（社での密会。眠り込んだ男など）であり、「猿源氏草紙」が描く鰐売の恋は術婆迦説話の翻案であること、「うそひめ」は「浄瑠璃十二段草子」の西行に酷似していることが指摘されている。
- 8 三角洋一「空海「三教指冊」の影響史」『磔』一八〇、二〇〇一は「白毫式」は後人の誤写で、もとは「三教しき」とし、藤原範兼が「三教指冊注」から引用した可能性に言及した。黒田彰子「三教指冊注は和歌童蒙抄の依拠資料か」『愛知文教大学 比較文化研究』九、二〇〇八は、三教指冊注の術婆迦譚のうち説話化・和文化した例が中山法華経寺本であるが、和歌童蒙抄所収説話とはかなりの違いがあること、また範兼の引用態度から考えて、そのような独自の展開を遂げた術婆迦譚を収録する書物がすでに存在していたのではないかと考えた。
- 9 島内氏は、東北大学図書館蔵「古今秘決」にある竹取物語の異伝も指摘している（「姫は」鏡ヲ形見ニラキテ、此世ヲサリヌ。御門不浅歎キタマヒテ、形見ノ鏡ヲ、胸フトコロニ持タマヒケレバ、御胸ヨリ火出テ、鏡ニツキテモユ。イカニケセドモ消ズ」というもので、富士山頂の火災の由来と、術婆迦説話の最肝要である胸から火を出すことが共通している。また「最明寺殿教訓百首」「いたづらに胸のはむらをもやしなば終に我が身をこがすなるらん」も指摘されている。
- 10 単行本収録時に島内氏は「異本紫明抄」のほか「横座房物語」「類題法文和歌集注解」巻十三を指摘した。「横座房物語」は、室町物語の世界に古今注が浸透している事例であり、「類題法文和歌集注解」は、和歌世界に術婆迦説話が流入していることを示す。
- 11 注6-7も参照。論証にはより詳細な分析が必要だが、さまざまなモチーフや型が複合しながら新たな恋の物語が生み出されていく過程で、術婆迦は一つの核になっていることを示したのである。
- 12

・13 『拾芥抄』は南北朝前期の洞院公賢（一二九一—一三六〇）を編者にあてる説
が有力だが、永仁二年（一二九四）の奥書を持つ『本朝書籍目録』に「拾芥
略要抄」とある。鎌倉中・後期中核部分が成立し、その後江戸時代にいた
るまで増補・校訂が行われたか（東京大学史料編纂所影印叢書『平安鎌倉記
録典籍集』「拾芥抄」解説。山内洋一郎編著『本邦類書 玉函秘抄・明文抄・
管蠡抄の研究』汲古書院、二〇二二、湯谷祐三『明文抄』と『拾芥抄』の諸
本―その「唐家世立部」の記述をめぐって―』愛知文教大学 比較文化研究
九、二〇〇八参照。

・14 印権煥『韓国仏教文学研究』高麗大学校出版部、一九九九年収「心火繞塔」
説話の仏典根源と土着的意味」（初出は一九六八）。小峯和明・増尾伸一郎編
訳『新羅殊異伝』平凡社東洋文庫、二〇二二は『大智度論』卷十四の「述婆伽」
説話を軸にしなから「善徳王の時代に創建された、王朝と深く関係する靈廟
（妙）寺が三度の災火に見舞われたこともあって、このような伝承が形成され
たものと思われる」とし、『三国遺事』卷三「靈妙寺丈六」（釈惠空は草で繩
をない、靈廟寺の金堂と左右の経楼、南門廊廡などを囲い結んだ。三日後、
善徳王が寺を来訪した際、「志鬼心火」が出てその塔を焼いたが、繩で囲った
ところだけは焼失を免れた）も紹介している。

・15 朴知忠「韓国説話研究紹介―印権煥「心火繞塔」説話巧―」『日本古代学』
五、二〇二三。

・16 趙鏞蒙「志鬼説話攷」『古典文学研究』十二、一九九七、韓国。以下の『情史』
は朴知忠氏の論から引用。